

『おくのほそ道』における漢詩の考察

——平泉の章——

高 春玲

キーワード：芭蕉、杜甫、春望、夏草、青みたり

要旨

本稿では『おくのほそ道』の平泉の章に於いて、杜甫の『春望』を踏まえている「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の諸外国語への翻訳文を比較し分析した。『おくのほそ道』の野坡本、曾良本、柿衛本及び西村本、これらの四つの原本を分析し、野坡本の「城春にして青みたり」から柿衛本の「城春にして草青みたり」に至る補筆訂正は、芭蕉が句文の推敲を重ね、内容・表現上の様々な工夫をこらしたものであることを確認した。『春望』についての解釈を調べたところ、東洋の自然観が中国と日本の場合に、違いがあることが判明した。『春望』の「草木深し」を芭蕉が「草青みたり」に換えたことによって、『春望』の「詩的表現」は変わった。「城春にして草青みたり」の「草青みたり」についての先行研究の論点をまとめ、「草青みたり」の意味について考察した。

1. はじめに

松尾芭蕉は元禄二年（1689）、旧暦の三月末に江戸深川を出て、粕壁（春日部）を経て下野・陸奥・出羽・越後・越中・越前の各地を遊歴し、八月下旬に美濃の大垣に至る。行程六百里（約2400 km）、五ヶ月間の旅であった。おくのほそ道の旅を思い立った動機に、西行・能因の跡を追って、みちのくの歌枕を訪ねるということがあった。

『おくのほそ道』の東の北限である平泉は、芭蕉が最も尊敬してやまなかった歌人の西行と源義経ゆかりの地である。西行は平泉を二度訪れていた⁽¹⁾。その平泉を訪れた時の芭蕉の感傷は、『おくのほそ道』全篇中のクライマックスの一つになっている。源義経や、その家来たちが平泉の高館で命を賭して戦ったことも、奥州藤原氏の百年間の栄華も夢幻のようであった。しかし、夏草だけは何もなかったかのように生い茂っていた。この時、芭蕉の脳裏には杜甫の次の詩が浮かんでいたであろう。「国破れて山河あり、城春にして草木深し」⁽²⁾。

『おくのほそ道』が書かれてから三百年以上の歳月が経っているが、現在も多くの人が芭蕉の跡を辿って旅をしている。昔の栄光がなければ、平泉は何の変哲もない小

さな町に過ぎないであろう。2011年6月に平泉・中尊寺金色堂はユネスコの世界遺産に登録された。観光客のほとんどは金色堂を拝観するために平泉を訪れる。平安時代末期、奥州藤原氏三代が砂金による財力で築いた地方政権は、辺境差別に抗し、戦乱に散った万物の霊を慰める「この世の極楽浄土」の樹立し、具現を志すも、義経との縁が仇となり、兄の源頼朝に滅ぼされた。これは平泉の歴史にとって重大な出来事であった。

源義経の居館があった高館に登れば、「北上川、南部より流ると大河なり」と芭蕉の「おくのほそ道」にあるように、北上川が眼下を悠々と流れ、風光絶佳である。しかしここには、義経主従の悲しい最期、すなわち、陸奥に語り伝えられた民族の哀史があり、それが恐らくは芭蕉のこの旅の発願に当たっての「道祖神の招き」ということではなかったのだろうか。芭蕉は、この絶景の中に人間の栄枯盛衰を感じたことであろう。

『おくのほそ道』の「平泉」のくだりに、「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」という文がある。「草青みたり」の表現は、まず野坡本の段階で「青々たり」と記されていたものが、曾良本の段階では「青みたり」となり、その後の補正によって「草青みたり」へと改められたものである。「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」という句は、杜甫の『春望』の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」と、湖伯雨の「白骨城辺草自ら青し⁽³⁾」、杜甫の「憂へ来つて草を籍いて坐せば浩歌涙把に盈つ⁽⁴⁾」などを踏まえたものと指摘されている⁽⁵⁾。

芭蕉の文学には漢詩の影響が多く認められ、特に蕉風開眼は漢詩文の影響下に形成されたといっても過言ではないと考えられている。『詩人玉屑』は芭蕉が深い影響を受けた書の一つであるが、芭蕉は最も尊敬していた杜甫を「杜少陵ノ詩ハ、自ラ造化ト流ヲ同クス。熟々擬義スベシ」と評している⁽⁶⁾。

芭蕉は杜甫の詩心に深く触れ、常に杜甫の心酒を嘗めて⁽⁷⁾いた。芭蕉の俳句・俳文の内には、直接に杜甫の詩を典拠とし、間接に杜甫の詩から暗示を得たと指摘されるものが少なくない。

芭蕉にとっての旅は漂泊である。その漂泊の旅で、芭蕉は、日本文化に影響を与えてきた大自然との交感を実践していた。芭蕉の自然に対する情熱的な感情が「おくのほそ道」の旅には常に溢れている。平泉に着いた芭蕉は眼前に青々と茂っている草に心を奪われて、杜甫の『春望』を言い換え、「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」と詠んだ、と言えるのではないだろうか。

芭蕉と杜甫の比較研究はこれまで数多く為されているが、その目的の一つは、二人の人生における最大の出来事—旅—を題材にしたものである。杜甫は望んで旅をしたのではなく、それはむしろ当時の社会情勢と深く関わっていた。芭蕉の場合は、自ら旅の生活を選んで、俗世から脱出し、隠者への道に進み、純粋な芸術を追求していた。同じように旅の中で人生を過ごした二人ではあるが、追い求めていたものは違っていた。生きることに對して異なる意識を持つ二人が目にする光景は、違うように映っていたことであろう。

2. 「平泉」の章の構成

芭蕉は出立の前から、松島と象潟を旅の目的地にしていた。この二つの地がまずは心に抱いた北限の地であった。ところが実際には、松島から石巻を経て平泉まで行った。これは道々奥州路に残された義経伝説に心を動かされ、その物語と歴史への追懐の気持が募ったことこそが、義経最期の地である平泉まで赴くことを志さしめるに至ったのであろう。

『おくのほそ道』の平泉のくだりは、十一の文と三つの発句とで構成させている。文と発句ごとに整理する。

2.1 原文⁽⁸⁾

- ① 三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有
- ② 秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す
- ③ 先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也
- ④ 衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入
- ⑤ 泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。
- ⑥ 侷も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる
- ⑦ 「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ
- ⑧ 夏草や兵どもが夢の跡
- ⑨ 卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良
- ⑩ 兼て耳驚したる二堂開帳す
- ⑪ 経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す
- ⑫ 七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、藁を覆て雨風を凌
- ⑬ 暫時千歳の記念とはなれり
- ⑭ 五月雨の降のこしてや光堂

2.2 高館覽古⁽⁹⁾と光堂

平泉の章は二つに分けられる。高館覽古と光堂である。

(1) 高館覽古

- ① 平泉の歴史と現状の説明。藤原氏の清衡・基衡・秀衡「三代の栄耀」の歴史は「一睡の中」と書き始め、続いて「大門の跡」は「一里」こなたにありという現況を説明している。
- ② 秀衡の居館は今「田野に成り」と目の前の現況をいう。眼前に一つだけ「金鶏山」は昔のままの姿であることを強調して「形を残す」。ここで「山」を語る。
- ③～⑤ 高館からの眺めである。「北上川」と「衣川」が「大河」につながる。『おくのほそ道』の「塩竈」のくだりで「勇義忠孝の士」という名を与えられた和泉三

郎の「城」（和泉が城）を語っている。義経の討死に直接関連する「泰衡」を出して、次の句⑥の「義臣」へのつながりを持たせている。

- ⑥ 平泉への眺めを終えて、歴史的事実への回顧をしながら、現況を説明している。目の前に見られるものは「一時の叢」だけである。この「一時の叢」は「栄耀一睡の中」と照応する。
- ⑦ 前半は杜甫の『春望』の最初の二句であるが、「草木深し」を「草青みたり」と書き換えている。和文脈とする自然な改変に違いないが、次の「夏草や」の句を、眼前即興として強く印象づける狙いがあるようである。「草木深し」では、季語（夏草）が追懐のためにする借物になってしまう。後半、芭蕉は、ここで長い時間を費やして、この平泉に展開された歴史的事実を回顧しながら、目の前の平泉の荒廃した現況を見渡して「泪を落し侍りぬ」と現況を説明している。

説明の順序は山、河、城となっている。また、①と⑥、②と⑤、③と④とはお互いに照応する。そして、⑧「夏草や」と⑨「卯の花に」という二つの発句が続く。⑧の「夢の跡」と①②及び⑤も「跡、旧跡」とは無関係ではない。

(2) 光堂

中尊寺は松島の瑞巖寺と同じく慈覚大師・円仁の開いた寺である。その金色堂（光堂）は、鞘堂で覆われ、廢墟とならず、昔の輝きをとどめている。「三将の像」、「三代の棺」及び「三尊の仏」がある。歳月の流れの中で、風や霜雪などによる浸食を受けて、「既頽廢空虚の叢と成べき」ものを「四面新に囲て、薨を覆て雨風を凌」とあるように、人々の努力によって、千年の形見となっている。そして、⑭の発句は自然の営みまでが感動しているように詠嘆している。

曾良の『随行日記』と芭蕉の『おくのほそ道』を対照してみる。曾良の『随行日記』には、金色堂の別当の案内で「光堂」を拝した⁽¹⁰⁾が、「経堂」は別当が留守のために参観できなかったと記されている⁽¹¹⁾。しかし、『おくのほそ道』には、経堂の内部について、実際には存在しない藤原氏三代の像を拝したかのごとく書かれている。即ちこの部分は、いわゆる文学的フィクションであることは明らかである。高館の眺望に義経の悲劇の歴史を偲び、光堂の内陳に藤原氏三代の栄華の夢を回顧した芭蕉の筆は、实景の写実的描写をはるかに超え、対句を連ねた自然と人生との対比の中で、流転の相の中における永劫なるものへの思いを響かせている。芭蕉はこのように書くことによって、義経への思慕や藤原氏三代への追懐の思いを託したのであろう。

3. 原文と翻訳の比較

「青蛙 躍進古池 水的音」⁽¹²⁾と「古池呀、——青蛙跳入水裏的声音」⁽¹³⁾、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」という句はこのように中国語に訳されている。前者は鄭振鐸⁽¹⁴⁾の訳で、後者は周作人⁽¹⁵⁾の訳である。両者とも、日本文化や日本語に詳しい中国近代の代表的文人である。

この中国語訳について、白川静は、『漢字百話』で、「躍進とか跳入ではこの句のもつ風姿を伝えることはできない」⁽¹⁶⁾と指摘し、さらに「この小さな生命の描き出す波紋は、このような表現の方向とは逆なものである」⁽¹⁷⁾と述べている。白川静の言いたかったことを、松岡正剛は『白川静—漢字の世界観』の中で次の4点にまとめている。⁽¹⁸⁾

- ① 日本人が漢字を自分たちの感覚や自然観や生活感情に合わせて使いこなしてきたこと、
- ② そこから、日本人独特の表現世界を生んできたこと、
- ③ その中には世界を震撼させるような芸術表現がたくさん生まれてきたこと、
- ④ 芭蕉の俳句ともなると、そこには中国的漢字表現では到底追いつかないものが醸し出されていること。

翻訳、とりわけ文学作品の翻訳は、難しい。それは、日本語と中国語また他の外国語という系統と語法の異なる言葉によって文化の伝統・背景の違う内容に移そうとするからである。世界で最も短い詩型と言われる俳句は、翻訳を不可能とみる学者⁽¹⁹⁾が多いが、しかし英訳について、鶴田欣也が「英訳された俳句の問題点」⁽²⁰⁾で指摘しているように、俳句を英訳する場合に、文化の違いはもちろんのこと、語感、語順、字数、切字、数の概念などの問題があるとしても、優れた俳句の英訳ならば、英語の短詩としてある程度は理解されるのではなかろうか。筆者は、当然ながら、英訳だけでなく、他の外国語の翻訳も同じであると考えている。従って、筆者は中国語訳の文章には特別の価値があるのではないかと考える。このことを論証するために、芭蕉の『おくのほそ道』の英文訳、独文訳及び中国語訳を比較し、相違点を分析する。

芭蕉の文では「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」となっているが、これが諸外国語にどのように翻訳されているかを比較検討する。

(1) 英文訳

① ドルシーブリトンの訳

Even though a country I defeated, Its mountains and rivers
remain. And o'er the castle ruins, when it is spring, The grass
will be green again. ⁽²¹⁾

② ドナルド・キーンの訳

Countries may fall, but their rivers and mountains remain;
when spring comes to the ruined castle, the grass is green
again. ⁽²²⁾

(2) 独文訳 (発刊年順に挙げる)

① G.S. Dombrady の訳

Das Land ist verwüstet — Berge und Flüsse aber blieben unversehrt —
über Burgruinen grünt, wenn der Lenz kommt, nur noch Gras! ⁽²³⁾

直訳：国は荒廃した --- しかし山々と河 (p.l.) は無傷のまま残った ---

春がきて、城の廢墟で青々としているのは、もはや草だけだ。

② 酒井吏・竹中康雄・土井ギーゼラの訳

Der Staat verlor die Schlacht,
es blieben nur Berge und Flüsse —
Frühling am Schloss
Gräser im frischen Grün. ⁽²⁴⁾

直訳：この国は戦いに敗れた／ただ山々と河（*pl.*）だけが残った ---

城の春／芽生えてきた緑の中の草々。

(3) 中国語訳（発刊年順に挙げる）

① 鄭民欽の訳

国破山河在，城春草木青。⁽²⁵⁾

② 閻小妹・陳力衛の訳

国破山河在，城春草木深。⁽²⁶⁾

③ 陳徳文の訳

国破山河在，城春草木深。⁽²⁷⁾

以上の三つの言語に訳された「国破れて山河在り」についての釈義はいろいろあるが、杜甫の『春望』の「城春にして草木深し」が芭蕉の『おくのほそ道』では「城春にして草青みたり」となっているということについて論じる。

三つの外国語の訳文を見ると、英文訳、独文訳及び中国語訳の①は、芭蕉の『おくのほそ道』の文章をほぼ直訳したものである。中国語訳の②と③は、杜甫の『春望』の詩の最初の二句のままになっている。『おくのほそ道』の翻訳書であるにもかかわらず、いわゆる「訳文」になっていない。「草青みたり」を、すなわち芭蕉の念頭にある杜甫の詩句（草木深）に逆戻りさせている。中国語訳の①は『おくのほそ道』の文意を汲んでいるものの、中国人である筆者にとって多少違和感がある。その違和感は漢詩のリズム感に合わないのではなく、自然に対する捉え方の違いではないだろうか。中国語訳の②と③が原文通りで敢えて「翻訳」されていない理由がそこにあるのではないかと考え、以下において考察する。

4. 原本における「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」について

芭蕉が「おくのほそ道」の旅から戻ったのは1689（元禄二）年9月である。草稿ができたのはその三年後、清書が完成したのは更に二年後の1694（元禄七）年の初夏であった。当時の印刷技術では本を大量に造ることは難しく、出版の規模は小さく、書写によって読者層を広げるのが一般的であった。『おくのほそ道』もその例外ではなかった。現在確認されている『おくのほそ道』の原本は、およそ十本存在している。このうち以下の四本は、芭蕉本人が何らかの形でその成り立ちに関わっていたと考えられ、よく『おくのほそ道』研究の考察の対象となる。

- ① 野坡本—『芭蕉自筆 奥の細道』⁽²⁸⁾
 平成八年に発見・紹介された。芭蕉自筆とされるものである。
- ② 曾良本—『おくのほそ道 曾良本』⁽²⁹⁾
 丈草本・曾良本(書写したのは利牛とする説がある)、「素龍筆芭蕉所持本」とも呼ばれている。
- ③ 柿衛本—『素龍柿衛筆本 おくのほそ道』⁽³⁰⁾
- ④ 西村本—『影印おくのほそ道』⁽³¹⁾

『おくのほそ道』の原稿から完成に至る過程における四本の関係について、櫻井武次郎の説⁽³²⁾によると、以下の図1のようになる。

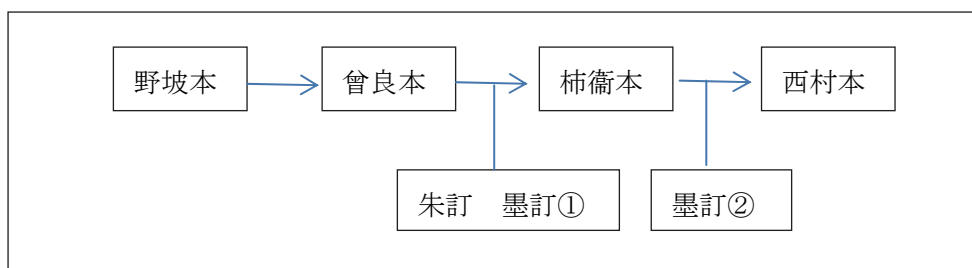


図1 『おくのほそ道』四つの原本の関係

諸本の関係を図1のように考えると、「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」に関する補正の経緯⁽³³⁾は次のようになる。

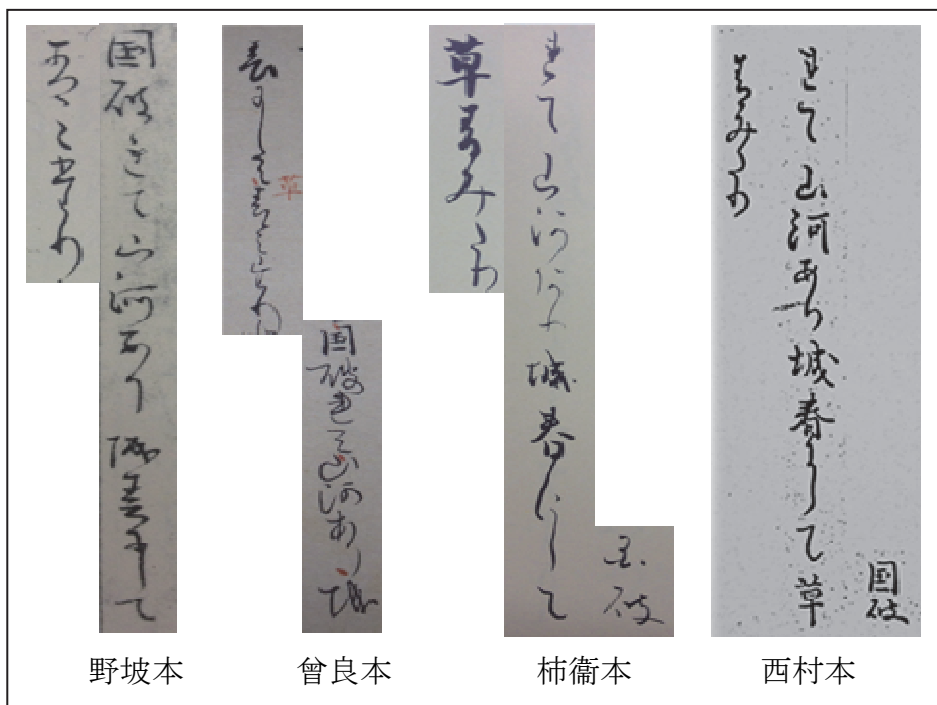


図2 諸本の「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」

野坡本： 国破連て 山河あり 城春尔して 青と堂利
 曾良本：(補正前) 国破連天 山河あり 城春尔して 青ミ堂利

(補正後) 国破連天・山河あ利・城春尔して・草青ミ堂利
 柿衛本： 国破連て 山河阿利 城春仁して 草青み多利
 西村本： 国破連て 山河あ利 城春仁して 草青み多利

崩し字を変えると、次のようになる。

野坡本： 国破れて 山河あり 城春にして 青々たり
 曾良本：(補正前) 国破れて 山河あり 城春にして 青ミたり

(補正後) 国破れて・山河あり・城春にして・^草青ミたり⁽³⁴⁾

柿衛本： 国破れて 山河あり 城春にして 草 青みたり
 西村本： 国破れて 山河あり 城春にして 草 青みたり

この四本の中でも特に注目すべきは、曾良本と称される写本である。曾良本は、野坡本の本文をかなり忠実に写した後で、朱と墨の二種類によって130個所にも及ぶ補正が施されたもので、『おくのほそ道』の推敲過程を考える上できわめて貴重なものである。ところで、これらの補正に関しては、芭蕉の筆跡であると言われている⁽³⁵⁾。しかし近年小林孔による素龍添削説という新説が提出された。但しその小林も、それらの墨訂が最終的に芭蕉の点検を経たものであることは認めており、従って曾良本の補正はすべて芭蕉による推敲と見なしてよいことになる⁽³⁶⁾。

「草青みたり」の表現は、まず野坡本の段階で「青々たり」と記されて、曾良本の補正では「草青ミたり」と改められた。芭蕉は「青ミ」を「青々」に訂正せず、「草」を補ったことについて、櫻井武次郎は「芭蕉自身、ここに誤写が生じていたと知った上で本文を改めたのか、知らずに改めたのか、知る由もない」⁽³⁷⁾と述べている。中森康之は、これを次のように分析している。

「まず「知った上で」なら、芭蕉は自覚的に新出本本文を捨てたことになる。つまりは、推敲。「知らずに改めた」場合。それは芭蕉に、初めから誤写直しの意識がなく、新出本を参照しなかったことを意味する。芭蕉の意識はここに立ち止まっているのである。新出本を参照して誤写を直すつもりだったのに、それを気付かず「草」を補ったとは非常に考えにくい（もちろん可能性ゼロではないけれど）。（中略）意識的であれ、無意識的であれ、芭蕉は新出本本文を採用しなかった。」⁽³⁸⁾（新出本は野坡本のことである。）

あるいは、芭蕉は最初から杜甫の『春望』をそのまま引用するつもりがなかったとも考えられる。この補正の過程で、最初から最後まで改めていないのは「青」という語である。なお、中森康之の分析によれば、芭蕉は「城春にして青々たり」（野坡本）が最

適だと思いつかなかったという。ここでは、「青々」と「青む」二つの語の意味から比較する。

まず、野坡本の「青々」という語について、中国の辞典では、その意味を次のように記載している。

青、青々：

- ① 春季植物葉子の緑色。《爾雅・釋器》：“青謂之葱。”《釋名・釋采帛》：“青，生也。象物生時色也。”
 - ② 深緑色。《古詩十九首》之二：“青青河畔草，鬱鬱園中柳。”宋蘇軾《雨》：“青秧發廣畝，白水涵孤城。”
- [青青]也作“箐”。茂盛貌。《類篇・青部》：“青，青青，茂盛兒。”⁽³⁹⁾

『角川 古語大辞典 第一巻』⁽⁴⁰⁾では、次の通りである。

青青：

いかにも青く見えるさま。「遠山ははや夕立すると見へて、まっくろになる。近山はいまだ静にあをあを」⁽⁴¹⁾とあるぞ」[中華若木詩抄・下]

次に、補正後の曾良本の「青みたり」の「青む」という語の意味について、「青くなる。青みを呈する。草木などが青く茂る」⁽⁴²⁾と示されている。

「青青」の意味は、中国の辞典では、生い茂る様子のことを言い、日本の辞典では色彩が青いことをいう。しかし「青む」という語は両方の意味を含んでいる。意味から見ると、「青む」は「青々」より豊かである。芭蕉は曾良本書き込みの時、「城春にして草青みたり」と「草」の字を補いながら、「ミ」を訂正していない。それは、芭蕉が「その時の感性によって、最良と思う文章を作っていたのである」⁽⁴³⁾と考えてよからう。

5. 自然に対する考え

「自然」が現在の自然の意味になったのは、おそらく西洋科学が中国に入ってから以後に、natureの訳語として「自然」が採用されてからであると考えられる⁽⁴⁴⁾。またこの訳語としての日本語の「自然」が「中国語の中に逆移入されたのではないか」⁽⁴⁵⁾と伊東俊太郎は推定している。自然という言葉について、古代の中国人はどのような風に理解していたのであろうか。

5.1 中国文人の自然観

中国人の自然観は、歴史の流れの中において様々に変化しているが、中国人の心の中の「自然」には、必ず濃厚な「人間味」が含まれている。すなわち「天人合一」の思想である。この思想は中国文化の中の「人間と自然との関わり」の基本的な概念の一つである。

(1) 中国古代文化の中における「自然」の意味

人間にとっての外界の自然界を一括して表現する「自然」という言葉は、中国の漢語にはなかった。代わりに「山水」など⁽⁴⁶⁾が用いられていた。

「自然」という言葉の最も古い用例は『老子』にある。老子はこう言う。

「人法地、地法天、天法道、道法自然。」⁽⁴⁷⁾

つまり、「人間は大地の法則に従い、大地は天の法則に従い、天は道(自然の運行)に従い、道は自然(大自然律)に従う、これが宇宙の原理である。

老子によれば、「道」と「自然」が一体となり、ひとまとまりとなっている。「自然」の「自」は「自分」であり、「然」は状態を意味する接尾辞である。それ故「自然」とは「自分のままである状態」をいう。つまり老子の「自然」は「人為の加わらない、おのずからある状態」を意味し、これは人間の良い生き方として重んじられていた。

三国時代を経て、魏晋南北朝(220年～581年)の時代になると、人々の自然現象に対する意識に変化が生じる。この時代は、「人のあるべき姿は自然に回帰することにある」という考えが流行していた。人々は、広々とした山林や田園の中での生活に憧れ、秀麗な山水の中で、悠々自適の生活をするようになった。

六朝時代に至ると、自由・逍遙なる文化気風はさらに洗練され、「自然と共に生きる」という人生観が生まれた。

六朝時代に、中国の文学の自然観の基礎が定まったが、実際には唐の時代の頃から、自然観はほぼ完全に形成されている。唐の時代において科挙制度が恒常的に実施されたことによって、文人学士が貴族に取って代わった。多くの文人学士は、出身は貧しいが博学で、文化教養が高かった。彼らを通して、自然観は上層社会の文化教養の共同財産となるとともに、新しい階段へと変化した。それは、自然に新たな意味を与え、さらに、生活条件の変化によって、詩人たちには時間と空間に対する感じ方の変化があった⁽⁴⁸⁾。

唐の時代に、文人たちが彼らの歴史観と人生の短さの意識を直接結び付けたという事は、不思議なことである。その原因の一つは、仏教の影響であろう。仏教は、人生の短さと夢幻を強調しているからである。

(2) 中国古代の自然観における道德観

中国人の自然観には道德主義の色彩が濃厚に反映している。文字によって記された歴史を通して見ると、中国の古代の人々が自然を見るとき、往々にしてある種の道德意識のもとに文芸創作活動を行っていたことが伺える。

例えば、『論語』の中に、「君子之徳風、小人之徳草、草上之風必偃」⁽⁴⁹⁾とある。孔子は「君子」(道德性を備えた人格者)と「小人」(道德性に欠け道理をわきまえない、くだらない人間)を「風」と「草」に譬えて、「君子の徳は風のようなものであり、小人の徳は草のようなものであるから、草の上に風を当てれば、草は必ず倒れる」と言っている。

また、中国人は自然に対して強烈な主観性を持っている。例えば、寒梅の美しさはブライドがあって屈しないところにあり、蓮の花の美しさを「泥から出てきてもその汚れに汚染されていない」⁽⁵⁰⁾ とするところにある。

5.2 日本人の自然観

(1) 日本における展開

空海の『十住心論』に、「自然⁽⁵¹⁾ (じねん)」という言葉が使われているが、「自然」が日本の書物で使われた最も早い例の一つであろう。その「自然」が老荘の「自然」と同じことだと空海は言っている。自然を「自ら然る」と動詞的に初めて使ったのは親鸞の「自然法爾⁽⁵²⁾」であろう。その後、「自然 (じねん)」は、人生論的なものから「凡そ天地人物の間、自然の条理あり」のような宇宙論へと移って「自然 (しぜん)」となった。しかしその「自然」は名詞化されたが、自律的運動変化を強調していたのであろう。現代の「自然」という言葉が *nature* と相覆うものとなったのは 18 世紀末期、オランダ語の *natuur* (ナチュール) の訳語である⁽⁵³⁾。

(2) 自然と人間の「根源的紐帯」

日本語の「自然」には人間・精神なども含まれることがある。

日本は島国であり、自然の景色は美しいが、その一方で自然環境は厳しいと言える。地震、台風などの自然災害が多いことが、日本人の独特な自然観に影響を与えている。

芭蕉の俳句だけではなく、日本の多くの古典文学作品には、日本人が長い間追い求めてきた「わび・さび・あわれ」などに代表される理念が込められた自然観が集約され反映されている。

伊東俊太郎によれば、日本の伝統的な「自然観」とは、「自然」と「人間」とのいわば一つの「根源的紐帯」によって結ばれているという日本人の心の深層におよぶ感覚であり、信念である⁽⁵⁴⁾ という。また、同氏は、日本の伝統的な「自然観」が、中国の伝統的自然観である「万物斉同」観、「天人同一」観とも異なると説いている⁽⁵⁵⁾。

6. 『春望』について

6.1 詩歌の背景

この詩は、唐の肅宗皇帝の至徳 2 年(757 年) 3 月、杜甫が 46 歳の時に書かれた。その 2 年前、安祿山の乱によって唐の玄宗皇帝は長安の都を追われ、四川へ逃げた。杜甫は逃げ遅れ、謀反を起こした者たちに長安で監禁されてしまう。その春に詠った詩である。

安祿山の乱によって、杜甫は深い憂愁を体験し、その後、杜甫の詩には大きな転換が見られる。それは人生が憂愁に満ちていることに対する覚醒である。この頃の杜甫の詩は、自己一身の悲しみを歌いながら、その悲しみは常に同じ悲しみを持つ多くの人々の嘆きとなっている。また彼の嘆きは決して弱者の泣き言ではなく、「政治的に国を憂える志の表現」⁽⁵⁶⁾ である。

この詩は、杜甫が、眼前の春の光景を詠んだものである。「国破れて山河あり、城春にして草木深し」には長安の荒廃の様子が表現されている。

一方芭蕉は、杜甫のように荒廃した眼前の世界を生々しく描いたのではない。五百年という長い歳月を隔てた古戦場跡を眺め、感慨を表すために、杜甫の『春望』を借用し、単に詩句をそのまま引用せず、「城春にして草木深し」を後に「城春にして草青みたり」と詠んだ。

芭蕉は「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」と詠んだ後、時の過ぎ行くままに涙を流して、そして「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んだ。永遠に生い茂る夏草と、はかなく瞬時に亡び失せ、夢と消えた義臣の勇戦が対置され、そこに「無常」、また「不易」の「理」⁽⁵⁷⁾もある。

6.2 詩歌についての分析

松岡正剛が『白川静一漢字の世界観』の中で中国語訳についてまとめている4点の一つは、日本人が漢字を自分たちの感覚や自然観や生活感情に合わせて使いこなしてきたことである。

杜甫の『春望』の表現に見られる自然観と、「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」に見られる自然観について、日中の相違から論じる。

『春望』の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」についての日中の解釈をまとめる。

(1) 中国人の解釈

①『春望』の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」について、司馬光⁽⁵⁸⁾は『続詩話』の中で、「古人為詩、貴乎在言外、使人思而得之。……国破山河在、明無余物矣；城春草木深、明無人跡矣」という。

司馬光の説を日本語に訳すと、次のようになる。「古人が詩を作る場合に言外の意味を読み取るのを重んじ、人の連想に委ねられて納得する。……国破れて山河在りとは、残るものが存在しないことを明らかにし、城春にして草木深しとは、人の通った跡がないことを明らかにしている。」

②呉見思は『杜詩論文』⁽⁵⁹⁾の中で次のように書いている。「国破山河在、在字則興廢可悲；城春草木深、深字則蒼蔚滿矣。」（日本語訳：「国破れて山河在り」の「在り」という語は昔の繁栄と今の荒れすたれた風景との比較によって、人を悲しくさせ、「城春にして草木深し」の「深」という語は、目に見える限り草木が生い茂っている印象を与える。）

③次のような説明がよく見られる。「開篇即写春望所見：国都淪陥、城池残破、雖然山河依旧、可是乱草遍地、林木蒼蒼。一個“破”字、使人怵目驚心、繼而一個“深”字、令人滿目淒然。」⁽⁶⁰⁾（日本語訳：詩の冒頭からすぐ春の眺めが書かれている：都が占領され、城壁に囲まれた都市は壊れてしまったが、山河は元どおりで、今は至る所に雑草が生え、雑木がいたずらに生い茂っている。ここでの「破」という字は、深刻な光景を

目にしている人々を驚かせる。続く「深」という字は、そこを目にしている人々の心を痛ませる。)

三つの解釈から『春望』の最初の二句の中の「在り」、「深」この二つの漢字の意味することが重要で、この二つの漢字は最初の二句の「詩眼」であると言える。

(2) 日本人の解釈

①松浦友久『校注 唐詩解釈辞典』

国は崩壊し、山河（やまかわ）のみが以前と変わらずに存在している。ここ長安も春になれば、草や木が昨春までと同じように青々と生い茂る。⁽⁶¹⁾

②黒川洋一『杜甫 上』

国都は破壊されたけれども山も河もむかしのままであり、都城には春がおとずれて草や木が青々としげっている。⁽⁶²⁾

前半の「国破れて山河在り」について、「国」の意味は異同がある⁽⁶³⁾が、後半の「城春にして草木深し」についての解釈は、日本人研究者等の解釈を見ると、芭蕉が詠んだ「城春にして草青みたり」とほぼ同じである。

杜甫の詩の「草木深し」は、中国の解釈としては、草木が茂る様子、或いは荒れ果てた風景を示すことである。しかし日本の解釈では、草木が青々と茂るとし、色彩感も表している。

6.3 まとめ

中国の詩歌は、中国宋の時代の範希文『対床夜話』の中で「景無情不発、情無景不生。情景相融而莫分也（日本語訳：感情がなければ、景色は感じられない。景色がないと感情は起こらない。）」と言い、これは中国古典詩歌の情景関係の基本の一つで、「情景相融」という関係である。これは、文芸作品で、作者が生活光景の描写を通して、感情を表すこととうまく組み合わせされていることで、「意境」とも言われる。また詩歌についての理解にとって不可欠なことは「貴乎意在言外（言外の意味を読み取るのを重んじる）」ことである。

また、中国の文学は、唯美主義的方向とともに、一方では政治的な関心を強度に持っていた。特に杜甫の詩には強烈な政治的色彩が溢れている。しかし、芭蕉が政治的な関心を持っていないとは言い切れない。ただ、二人の政治に関心を持つ強度は、杜甫の方が明らかに強い。日中の自然観の違いと政治的な関心度の違い、この二点によって、杜甫の『春望』についての日中の理解が異なっていると考えられる。

『春望』の解釈は、中国の場合、破れた国に春が訪れてきても、目にするのは、城が空いて人は少ないが、雑草や雑木が生い茂って惨めな景色であり、そこには色と言え、暗い灰色だけであり、美の意識は全くない。

一方、日本では、第一句（国都は破壊されたけれども山も河もむかしのままである）と二句（都城には春が訪れて草や木が青々と茂っている）とを合わせることで、自然（山河、草木）と人為（国、城）との対比を示している。「草木深し」についての通釈では、春という季節の自然な成り行き描写としている。国は破れたが、春が訪れて、草や木が以前と同じように青々と生い茂っている。ここに述べられているのは破れた国に対する憂国の念とは関係なく、悠久の自然に対する思いである。人は滅びても自然はそのまま残っている。そこには滅びたものの美しさと、はかなさが込められている。

7. 平泉の章における『春望』の借用

『おくのほそ道』の本文の総字数は一万一千数百字にもかかわらず、漢詩文を踏まえていると指摘される箇所は50か所を超え、芭蕉独自の文章と相まって多彩な文章となっている。

平泉の章では、杜甫の『春望』がそのまま引用されているのではなく、「草木深し」を「草青みたり」と言い換え、あるいは『春望』の「詩の表現」を変えることで、その詩の解釈を変えている。

7.1 論点のまとめ

「国破れて山河在り、城春にして草木深し」と「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」についての先行文献の議論の要点を整理して、その見解を検討する。

先行文献の論点は、以下のようにまとめられる。

(1) 吉川幸次郎の論点

吉川幸次郎は「草木深し」と「草青みたり」について、以下のように述べている。

杜甫の詩の「草木深し」と云う所は、芭蕉の「草青みたり」と一致させていいのだろうか、芭蕉が間違えて記したのか、それとも他に理由があったのだろうか。(中略)「草木深し」といえば、何となく盛々と草木が繁茂しているようすが分かる。詩全体として見れば、そのところは色彩感と言うより、むしろ、荒れ果てた風景を示すことができればそれでよいのである。「草青みたり」とすれば、色彩感から言うと、こちらの方が効果的な表現である。⁽⁶⁴⁾

芭蕉は高館に上って、目の前の平泉の「昔と今」に思いを巡らせていた。杜甫の「春望」の「国破れて山河あり、城春にして」を引用しているが、杜甫の「草木深し」については、そのまま引用せず、「草青みたり」としている。吉川幸次郎は、「芭蕉が間違えて記したのか、それとも他に理由があったのか」として、明確な説明はしていない。津

田亮の考えでは、これによって「自己の感慨を表現」⁽⁶⁵⁾ しているように読み取っているというのである。

芭蕉が『春望』の起聯である「国破山河在、城春草木深」の「草木深」を「草青みたり」と言い換えていることについて、筆者は次のように考える。すなわち、「時のうつるまで涙を落し侍りぬ」という長い回想の時間の中から、「夏草や兵どもが夢の跡」の一句を詠み、次いで眼前の茫々の夏草をとらえ直したために、「草木」を「草」にしたのではなかろうか。

「草木深し」を「草青みたり」と改めて、戦いに斃れた義経及び兵士たちの菩提を弔ったのではないかと考えられる。眼前の青々としている草を「草青みたり」というふうにより、色彩を明確に描くことにより、義経等が討伐された古戦場の荒れ果てた光景を彷彿とさせる効果があるのではないかと考える。

また次の段落で、吉川幸次郎は「草木深し」と「草青みたり」の違いを説明している。それは、「草木深し」が荒れ果てた風景を表すのに対し、「草青みたり」の方が色彩感から効果的な表現であると指摘している。

この吉川幸次郎の見解は傾聴に値する。この見解は、まさに日中の自然観の違いである。

(2) 尾形侑の論点

『春望』の中の「国破山河在、城春草木深」の「草木深」を、芭蕉が「草青みたり」と言い換えている点について、尾形侑は、「杜甫の詩が山河・草木といった自然と、国・城といった人為とを対比し、常住と流転の対比といった形で憂悶の情を述べているのに対して、芭蕉もまた、自然と人生、永劫と流転を対比する字句を連ねて、この一章をつづっている」⁽⁶⁶⁾ と述べている。

つまり、杜甫が自然と人為および常住と流転を対比し、芭蕉が自然と人生および永劫と流転を対比しているというのが尾形侑の見解である。

中国文学において、自然と人為あるいは人事はしばしば論じられる。中国文学は、自然と人事の絡み合い、或いは調和、しかるべきよき配合によって成り立っているとされるように、自然が中国文学において非常に重要である。

また、尾形侑は、「「草青む」は近世の季寄せ類に季語として登録されていないが、景色としては春景で、これは眼前の夏草から、春草を詠み込んだ古詩の世界へと思いを馳せたものとするべきだろう」⁽⁶⁷⁾ と記している。

(3) 塚越義幸の論点

塚越義幸は尾形侑と違う論点を持っている。塚越義幸は、芭蕉が杜甫の詩情を踏まえつつも、「ここでは特に眼前に広がる現実の夏、とりわけ梅雨時の景観を述べようとするため、春の「草木深し」から「草青みたり」へのアレンジが、梅雨時のくすんだ叢の色を表現するために必要」⁽⁶⁸⁾ だったと説いている。

春の景色の中の草が「草木深し」であり、夏の景観の中の草に「草青みたり」をつけている。ここでは、「城春」という前提があり、夏の草を描くということはある程度あり得るのであろうか。

『おくのほそ道』の「白河の関」の章には「秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする」とある。この文では、春の景色を描写しているが、芭蕉は春の景色をより一層際立たせるために、秋（秋風、紅葉）と冬（雪）および夏（茨の花）の描写を織り込んでいる。このことから、「城春にして」では、「春」という季節を前提としているが、「草青みたり」は「現実の夏、とりわけ梅雨時の景観」であるというのが塚越義之の説と言える。

(4) まとめ

尾形侑が述べているように「草青む」は近世の季寄せ類に季語としては登録されていないが、いまは春の季語として使われている。「青む」という語は芭蕉が作った語ではなく、『源氏物語』（紅葉賀）の中に「御前の前栽の、何となく青みわたれるなかに、常夏のはなやかに咲き出でたるを、折らせたまひて、命婦の君のもとに、書きたまふこと、多かるべし」と書かれている。

「草青む」という語も『風雅和歌集』冬部・八八一に「おのづから垣根の草もあをむなり霜の下にも春や近づく〈伏見院〉」と記されている。ここの「草青む」という語は季語として使われたのではない。

そして、古い歳時記を調べてみると、「草萌」という語は見つかるものの、「草青む」という語は、芭蕉の百年後の一茶の発句の中に春の季語として使われている。

例えば、御仏の座し給ふ程草青む

七番日記 化10

餅になる草が青むぞ青むぞよ

七番日記 化11

石畳つぎ目つぎ目や草青む

八番日記 政2 (出)『発句集続篇』

7.2 「草青みたり」について

『おくのほそ道』において「草」について書かれている文は次の通りである。

- ① 草の戸も住替る代ぞひなの家（序章）
- ② 一夜の草の枕も打解て休み給へ（仏五左衛門）
- ③ 草刈おのこになげきよれば（那須）
- ④ 豎横の五尺にたらぬ草の庵（黒羽）
- ⑤ いづれの草を花かつみとは云ぞと（あさか山）
- ⑥ 往来の人の麦草をあらして（しのぶの里）
- ⑦ 紺の染緒つけたる草鞋二足銭す（宮城野）
- ⑧ あやめ草足に結ん草鞋の緒（宮城野）

- ⑨ 落穂・松笠など打けふりたる草の菴閑に住なし（松島）
- ⑩ 城春にして草青みたり（平泉）
- ⑪ 夏草や兵どもが夢の跡（平泉）
- ⑫ ある草庵にいざなはれて（金沢）
- ⑬ 菊から草のほりもの金をちりばめ（小松）
- ⑭ とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ（全昌寺・汐越の松）
- ⑮ みづから草を刈、土石を荷ひ（敦賀）

『芭蕉語彙』によると、「草」については、二つの語義がある。

㊦ 植物の中、その地上部が概して柔軟漿で、木質組織及び年輪を形成せず、且つ木の如く大なる成長をなさざるもの。多くは一年生または二年生で、多年生のものもあるが、地上部は年々枯死する。草木。

① 物事を生ずるものとなるもの。たね。材料。種。^{くさ}(69)

上の解釈の㊦を取り、草を単なる雑草と意味する文は②⑩⑪⑮である。この中の②の文と⑮の文では、「草刈」・「草を刈」が季語として用いられており、夏である。茫々としての生命力の強い雑草というインパクトを与えた文は⑩と⑪である。その上、⑩と⑪は同じ平泉の章である。これは単なる偶然であろうか。

⑪の「夏草や兵どもが夢の跡」という発句は、『曾良日記』には記載がなく、初めて記載されたのが、元禄4年5月末頃までに成った『猿蓑』である。⑩の「城春にして草青みたり」という文は推敲に推敲を重ねた文である。杜甫の詩の「草木」を「草」に改め、「草青みたり」という語は「夏草」に合わせて作ったのではなかろう。「夏草や兵どもが夢の跡」は杜甫の『春望』と同じく廢墟の上に立っての回顧の詩として、発想の中核において繋がるものがあるが、「草木深し」から「草青みたり」に改め、「夏草」の「草」が再び現われ、青々と広がる草の生命力が強く響いてくる。

8. まとめ

本稿では、『おくの細道』の平泉の章を手がかりにして、自然観について、「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」の解釈を通して比較を試みた。とりわけ、自然を見る目と自然への対応の仕方を中心に論じた。

「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」という句は、杜甫の『春望』の最初の二句「国破れて山河在り、城春にして草木深し」を引きながら、「草木深し」を「草青みたり」に換えている。そのように換えるところに、生えては枯れ、枯れては生える草に対する見方、あるいは自然に対する日中の考え方の違いが表れている。「深」という漢字から、中国人は都の荒れ果ててしまったイメージを感じるが、日本人の見方は「草

が生い茂る」のである。さらに、芭蕉の「草青みたり」という語からは、眼前に青々と広がる草の生命力が強く響いてくる。

濃厚な「人間味」が含まれている中国人の自然観からは、悲しい詩歌の中に「草」を見ても、草が青々と強く生きているようには感じられない。そのため、芭蕉が詠んだ「国破れて山河在り、城春にして草青みたり」を中国語に翻訳するとき、単に直訳しただけでは必ずしも正鵠を射ることにはならない。

歌枕巡礼を旅の目的として平泉を訪ねた芭蕉は「おくのほそ道」の旅の途中で、唐詩に詠まれた「春の草」への思いを馳せることにより、いま目の前にある「夏草」を、ただ漫然と眺めるのではなく、深く「あわれ」を感じ、詩的感動がかき立てられたところに、芭蕉の自然観、ものの見方の大きな特色があると考えられる。

芭蕉は人間をも自然の一部とみて、移り変わる自然の中にその移ろいを読み取っている。

〔注〕

- (1) 1度目は、西行20代後半の頃と推測されており、2度目は文治2年(1186)、西行69歳の頃、東大寺再建のための砂金勸請に秀衡を訪ねたときであった。
- (2) 杜甫の五言律詩『春望』の「国破山河在、城春草木深」である。
- (3) 湖伯雨の「望淮」の詩「江月荒荒江水腥、江頭燐火似秋螢、春風何処無生意、白骨城辺草自青」(『錦繡段』遊覧)。
- (4) 杜甫の「玉華宮」の詩「憂來藉草坐、浩歌淚盈把」。
- (5) 尾形仿『おくのほそ道評釈』角川書店、平成13年、247頁。『奥の細道—古人の心を探る幻想の旅』学研、2002年、137頁。
- (6) 仁枝忠「芭蕉の俳論と漢文學」『津山工業高等専門学校紀要』(第2巻 第2号)、252頁。
- (7) 井本農一・久富哲雄・村松友次・堀切実校注・訳『松尾芭蕉集②紀行・日記編 俳文編 連句編』小学館、2008年、188頁。芭蕉の『虚栗』跋における「李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る」による。
- (8) 萩原恭男校注『芭蕉 おくのほそ道』(岩波書店、2008年、40～41頁)による。
- (9) 覧古(古い物事を深く思うこと)李白に「越中覧古」、「蘇台覧古」があり、陳子昂に「薊丘覧古」がある。
- (10) 萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道』岩波書店、2008年、103頁。『曾良日記』では、「十三日 天気明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。一リ、山ノ目。壺リ半、平泉(伊沢八幡壺リ余り奥也)へ以上弍里半ト云ドモ弍リニ近シ。高館・衣川・衣ノ関・中尊寺・光堂(金色寺、別当案内)・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等ヲ見ル」と実際に見た所を記している。
- (11) 同上、103～104頁。『曾良日記』では「経堂ハ別当留守ニテ不開」と記している。
- (12) 白川静著『漢字百話』中公新書、2009年、228頁。
- (13) 呉紅華『周作人と江戸庶民文芸』創土社、2005年、59頁。
- (14) 鄭振鐸(ていしんたく)(1898年12月19日～1958年10月17日)は、中華民国・中華人民共和国の作家・文学研究者・政治家で、中国民主促進会の発起人の一人である。字は西諦。書齋には「玄覽堂」の号を用いた。

- (15) 周作人（しゅう さくじん）（1885年1月16日～1967年5月6日）は現代中国の散文作家、翻訳家。魯迅の弟。
- (16) 白川静著『漢字百話』 中公新書、2009年、229頁。
- (17) 同上、229頁。
- (18) 松岡正剛『白川静—漢字の世界観』 平凡社、2008年、224頁。
- (19) 中野好夫『翻訳ノート』 岩波書店、1955年。萩原朔太郎『翻訳文学』 角川書店、1961年。
- (20) 鶴田欣也「英訳された俳句の問題点」 『比較文学』第8巻（日本比較文学会、1965年）20～27頁。
- (21) ドルシー・ブリトン訳、英文版『奥の細道』 講談社、2008年、57頁。
- (22) ドナルド・キーン訳、英文収録『おくのほそ道』 講談社学術文庫、2007年、125頁。
- (23) G. S. Dombrady: Auf schmalen Pfaden durchs Hinterland. Mainz, Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung, 1985. S.167.
- (24) 酒井吏・竹中康雄・土井ギーゼラ 《Oku—no—Hosomichi—Auf schmalen Pfaden in den fernen Norden》 三修社、2005年、61頁。
- (25) 郑民钦译《奥州小道》 北京：河北教育出版社、2002年、84頁。
- (26) 阎小妹・陈力卫译注《奥州小道》 西安：陕西人民出版社、2004年、51頁。
- (27) 陈德文译《松尾芭蕉散文》 北京：作家出版社、2008年、49頁。
- (28) 上野洋三・櫻井武次郎編『芭蕉自筆 奥の細道』 岩波書店、平成9年。
- (29) 『おくのほそ道 曾良本』 天理図書館善本叢書、八木書店、昭和47年。
- (30) 『素龍柿衛筆本 おくのほそ道』 新典社、平成21年。
- (31) 櫻井武次郎編『影印おくのほそ道』 双文社出版、平成3年。
- (32) 櫻井武次郎『奥の細道の研究』（「曾良本から柿衛本・西村本へ」） 大阪：和泉書院、2002年、224～226頁。
- (33) 曾良本における朱と墨による補正の違いは、モノクロの『天理図書館善本叢書』では明らかではないので、西村真砂子『校本おくのほそ道』（福武書店）に従った。
- (34) 行間の補入：「青ミ多り堂」では「青」の右上に漢字で朱の「草」を加えてある。
- (35) 松村友次『曾良本「おくのほそ道」の研究』 笠間書院、昭和63年、4頁。
- (36) 小林孔（こばやしとおる）『『奥の細道』の展開—曾良本墨訂前後—』 『季刊文学』9—2、平成10年。
- (37) 櫻井武次郎著「芭蕉自筆『奥の細道』の顛末」 PHP研究所、1997年、118頁。
- (38) 中森康之「新出本『奥の細道』の性格—底本修正問題をめぐって曾良本へ—」 『芭蕉 日本文学研究大成』、国書刊行会、平成16年、26頁。
- (39) 漢語大字典編輯委員會『漢語大字典』 成都：四川辭書出版社・湖北辭書出版社、1993年、1684頁。
- (40) 中村幸彦・岡見正雄・坂倉篤義編集『角川 古語大辞典 第一巻』 角川書店、昭和57年、177頁。
- (41) 下線は筆者による。
- (42) 日本大辞典刊行会編集『日本国語大辞典 第1巻』 小学館、昭和51年、83頁。
- (43) 中森康之「新出本『奥の細道』の性格—底本修正問題をめぐって曾良本へ—」 『芭蕉 日本文学研究大成』、国書刊行会、平成16年、26頁。
- (44) 赤祖父哲二・川合康三・金文京など編集『日・中・英言語文化事典』 マクミラン ランゲージハウス、2000年、827頁。
- (45) 伊東俊太郎『自然』 三省堂、1999年、63頁。

- (46) 当時の中国語の場合「天地」は自然界全体を総括し、「万物」はそこにおける様々な具体的事物全体、「造化」はそれらが変化してゆく力を表す。「自然」という統合した名詞は、「鳥獸草木」(『論語』)、「山沢禽獸」(『莊子』)、「山海水潦土石」(『淮南子』)のような自然界の具体的な存在の名称で表す。また、六朝時代に入り、謝靈運などによって天然の美を謳う自然詩が生み出されたが、それらはあくまで「山水詩」と呼ばれ、「自然詩」と呼ばれることはなかった。
- (47) 蜂屋邦夫訳註『老子』(第二十五章) 岩波文庫、2008年12月、116頁。「人は地に法」るとは、たとえば地勢に従って耕作すること。以下、「地」は日月や四季という「天」に従って樹木などを生育させるし、「天」に秩序があるのは「道」に従うからだし、「道」は自ずからそうである、ということ。「自ずから然り」とは、他からなんの力も及ぼされることなく、それ自体でそのようである、ということの哲学的な表現。(中略)「道」は「自然」の同義語であり、視角が違うだけといえよう。
- (48) Kubin, Wolfgang《中国文人的自然観》上海文芸出版社、1981年、80～90頁。
- (49) 金谷治訳註『論語』(顔淵第十二の十九篇) 岩波文庫、1999年1月、238～239頁。季康子問政於孔子、曰、如殺無道以就有道、何如、孔子對曰、子為政、焉用殺、子欲善而民善矣、君子之德風、小人之德草、草上之風必偃。
- (50) 北宋時代、周敦頤の『愛蓮説』の「予独愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭浮植、可遠觀而不可褻翫焉」。
- (51) 川崎庸之校注『空海』 岩波書店、1991年、56頁。「經に自然と云ふは、謂わく、一類の外道の計すらく、一切の法は皆自然にして有なり。」ここの「自然」についての解釈は、他より何らかの力を加えられることなく、自ら然ること。
- (52) 親鸞は「自然」とは「如来のちかひ」で、信仰する者はこのことばをやたらに口にせずただ「自然」に従え、と説いた(『未燈鈔』)。
- (53) 稲村三伯が1796年に日本最初の蘭日辞典『波留麻和解』を編んだとき、オランダ語の *natuur* (ナチュラル) に「自然」という訳語をあてた。
- (54) 伊東俊太郎『自然』 三省堂、1999年、107頁。
- (55) 同上、109頁。
- (56) 小西甚一『日本文藝史IV』 講談社、1987年、326～327頁。
- (57) 同上、327頁。
- (58) 司馬光(しばこう、1019年 - 1086年)は、中国北宋代の儒学者、歴史家、政治家。
- (59) (清)呉見思注『杜詩論文』(清)潘眉評；(清)董元愷參) [出版者不明]、康熙壬子 [1672] 序。
- (60) (清)蘅塘退士選編《唐詩精品鑒賞》 北京：太白文芸、2007年、207頁。
- (61) 松浦友久『校注 唐詩解釈辞典』 大修館書店、1992年、338頁。
- (62) 黒川洋一『杜甫 上』 岩波書店、1997年、47頁。
- (63) 「国」の意味は二つの説がある。一つは「国家(中国)」(この説を採るもの：森槐南『杜詩講義』中巻(文会堂書店、1911年)、衛中・馬志瑞『古詩一百首』(北京出版社、1983年))である。もう一つは「国都(長安)」(この説を採るもの：内田泉之助『新選唐詩鑑賞』(明治書院、1956年)、楊磊『読点唐詩』(雲南人民出版社、1981年))である。
- (64) 吉川幸次郎『杜甫Ⅱ 世界古典文学全集29』 筑摩書房、1972年、81頁。
- (65) 津田亮著『素龍筆柿衛本 おくのほそ道の読みと解釈』 教育出版センター、昭和55年、116頁。
- (66) 尾形仂『おくのほそ道評釈』 角川書店、平成13年、251頁。

- (67) 同上、247 頁。
(68) 塚越義幸「「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の解釈をめぐって」
『野州國文學 65 号』、國學院大學栃木短期大學國文學会、2000 年。
(69) 宇田零雨著・東浦佳子編著『芭蕉語彙』 青土社、2007 年、484 頁。

〔参考文献〕

- 伊東俊太郎（1999）『自然』 三省堂
宇田零雨著・東浦佳子編著（2007）『芭蕉語彙』 青土社
尾形侑（2001）『おくのほそ道評釈』 角川書店
尾形侑編（1981）『芭蕉必携』 祥文堂
楠元六男・深沢真二編（2009）『おくのほそ道大全』 笠間書店
黒川洋一（1997）『杜甫 上』 岩波書店
小西甚一（1987）『日本文藝史IV』 講談社
櫻井武次郎（2004）「曾良本から柿衛本・西村本へ」 『奥の細道の研究』、和泉書院
白川静（1980）『漢字百話』 中央公論社
塚越義幸（2000）「「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の解釈をめぐって」
『野州國文學 65 号』、國學院大學栃木短期大學國文學会
松岡正剛（2009）『白川静—漢字の世界観』 平凡社
松浦友久（1992）『校注 唐詩解釈辞典』 大修館書店
萩原恭男校注（2008）『芭蕉おくのほそ道—付曾良旅日記奥の菅菰抄』 岩波書店
山本健吉（2006）『芭蕉—その鑑賞と批判』 飯塚書店
山本健吉（2010）『奥の細道—現代語訳・鑑賞』 飯塚書店
吉川幸次郎（1972）『杜甫Ⅱ 世界古典文学全集 29』 筑摩書房
吉川幸次郎（1968）『吉川幸次郎全集 12』 筑摩書房
ドナルド・キーン訳、英文収録（2007）『おくのほそ道』 講談社学術文庫
ドルシー・ブリトン訳、英文版（2008）『奥の細道』 講談社
陈德文译（2008）《松尾芭蕉散文》 北京：作家出版社
（清）蘅塘退士選編（2007）《唐詩精品鑒賞》 北京：太白文芸
阎小妹・陈力卫译注（2004）《奥州小道》 西安：陕西人民出版社
郑民钦译（2002）《奥州小道》 北京：河北教育出版社
酒井吏・竹中康雄・土井ギーゼラ（2005）《Oku-no-Hosomichi—Auf schmalen
Pfad in den fernen Norden》 三修社
G. S. Dombrady（1985）：Auf schmalen Pfaden durchs Hinterland. Mainz, Dieterich'sche
Verlagsbuchhandlung

